

## 52 とんでもねえ太郎左衛門 たろうざえもん

伝承地：下欠町623

話者：9



(太郎左衛門が鯨口を奉納した光照院)

姿川地区の下欠及び上欠町周辺では、ブラブラして遊んでいる人のことを「とんでもねえ太郎左衛門」と呼んだ。

これは、元禄時代、下欠下村に実在した太郎左衛門がたいへん怠け者であったことに由来している。

太郎左衛門は、下欠村の庄屋の長男として生まれたが、生まれつきの怠け者であったという。

しかも、太郎左衛門は庄屋としての身分をかさにきて村人

にたびたび迷惑をかけていた。たとえば、自分の田の田植なのに村人に手伝わせ太郎左衛門は姿を見せなかったという。

一時が万事この調子であったため、年貢米も滞り、ついに領主からとがめられ太郎左衛門は所ばらいになってしまったと伝えられている。



## 53 名主 弥治右衛門 なぬし やじえもん

伝承地：二荒町5丁目

参考書籍：6～8



(今小路周辺の古地図)

松平氏が宇都宮城主であった17世紀のなかごろ、今小路町（今の二荒町、一番町、二番町）の名主で、弥治右衛門という人がいた。情深い人で家業を弟に譲り、世話好きで、妻もとらず、一生独身で過ごした。

延宝8年（1680）から天和2年（1682）にかけての3年間は、大飢饉となったので餓死する人が、何人かあったが、弥治右衛門は、これを憐み、1月に2度ずつ粥を煮て施しをした。これ

を聞いた人々は、村々の百姓まで押し寄せ、いつも列をつくって並び、その数は1回数百人に達した。この救済を3年間続けたので、餓死する人はほとんどなくなったという。

弥治右衛門は、たびたび名主の役をやめたいと町奉行に願い出たが、その人格が立派であったのでなかなかやめることができなかった。老齢になり名主を辞してからは、興禅寺の林の中に小さな小屋を建て、隠遁した生活を送ったという。

